

## 博士学位論文

(要約)

『源氏物語』頭中将とその一族の《系譜》考  
A Study of the "Lineage" of To No Chujo and  
His Clan in The Tale of Genji

聖心女子大学

文学研究科・人文学専攻

松本 美耶

## 【序】

従来、『源氏物語』主人公である光源氏をめぐる物語については、一度は臣籍降下した皇子が父帝の妃との不義の恋によって准太上天皇の地位へのぼり、栄華を達成するという王権の論理をもって描かれていることが指摘されてきた<sup>注1</sup>。一方、光源氏生涯の好敵手だった頭中将とその一族の物語については、鈴木日出男氏が「しよせん王権を潜在させている源氏の体制下に組みこまれるしかなかった」<sup>注2</sup>と指摘するように、あくまで主人公光源氏の生を描くために、その時々において選択された設定が呼び込まれたに過ぎないものとして見なされてきたように思う。本論文は、「政治」と「結婚」・「恋」という二つの観点から改めて『源氏物語』頭中将とその一族の《系譜》について考察することにより、彼らの物語を貫く固有の論理の存在を明らかにする。

まず本論文の前半にあたる第一章、第二章では、「政治」という視点から頭中将一族の《系譜》について考察する。従来、頭中将とその一族の「政治」については、主に弘徽殿女御や雲居雁、玉鬘といった娘たちの後宮政策の失敗から、勝者である光源氏に対する政治敗者としての面について論じられることが多く、頭中将の政治能力についてはさほど高い評価はなされてこなかった。しかし本論文では、史実や『うつほ物語』など他の物語世界における藤原氏との比較から、改めて『源氏物語』頭中将一族の政治家としての在り方を検討する。そして、彼ら一族が常に鋭敏な政治感覚をもって代々の帝に近侍し、光源氏や他の一族との政治闘争に挑む、非常に高い政治能力を有する一族であったことを実証している。

また、本論文の後半にあたる第三章から第五章では、頭中将一族の「結婚」・「恋」の《系譜》について、主に一族の皇女執着という点に着目し検討を行っている。先にも顧みたように、従来光源氏の「恋」の問題については、高橋亨氏の「私的な〈恋〉が〈王権〉や政治とうらはらのテーマとして設定されている」<sup>注3</sup>という指摘のごとく、古代王権の論理に貫かれていることが早くから確認されてきた。一方、頭中将一族の「恋」や「結婚」の問題については、光源氏側の事情に沿ってあくまで無作為に選び取られたものとして考えら

れてきたため、勝者である源氏に相対する政治敗者としての一面に焦点が当てられるのみで、「恋」や「結婚」の問題が、彼ら一族の物語と一体どのように切り結ばれていたかについては、これまで十分に論じられる機会はなかったように思う。

しかし、本論文では頭中将とその一族の「結婚」・「恋」の《系譜》について、主に一族の皇女への憧憬という点に着目し改めて検討を行った結果、次のような論理が見えた。本来彼らは、藤原氏長者である左大臣と后腹内親王の大宮との異例の結婚によって誕生した、非常に高貴な藤原氏一族であった。にも拘わらず、光源氏の栄華達成の裏側で政治敗者となることによって、王族の血——皇女——への強い執着を、頭中将、柏木、そして薫といった一族の男子たちが、代々《系譜》として抱え込むことになったのである。このように本論文の後半では、頭中将とその一族の「結婚」・「恋」の物語にもやはり、政治敗者固有の心情、論理というものが存在してこといたことを明らかにしている。

なお、以下に各章の要約を述べる。

### 【第一章】『源氏物語』の「致仕」をめぐって

第一章では左大臣とその子・若菜上卷太政大臣(もとの頭中将)の辞職——「致仕」——に着目し、本来七十歳以上の人物にのみ認められる「致仕」という恩典付きの辞職が、なぜ七十歳に満たない左大臣、太政大臣の親子二代にわたって認められているのかという点について、史実の検討を踏まえ考察を行った。彼らの「致仕」はいずれも史実における七十歳未満の「致仕」と同様に、先帝との親密な関係によって与えられた帝の特別待遇であったと考えられる。特に左大臣の「致仕」については、その背後にある政治状況や故桐壺院の遺言の存在を視野に入れることによって、恩典付きの辞職である「致仕」という措置に賭けた朱雀帝自身の強い意志が窺える。また、太政大臣の「致仕」をめぐって、史実における七十歳未満の「致仕」の実態と照らし合わせ、物語における彼の生を顧みるとき、冷泉帝と太政大臣との密接な君臣関係がはっきりと浮かび上がった。

『源氏物語』左大臣一族とはまさに、賢臣として天皇家を支えるという政治的使命を担った、非常に重要な一族であったと言えよう。

### 【第二章】『源氏物語』雲居雁の引き取りとその養育をめぐって

本章では、内大臣一族の周到な政治手法について、『源氏物語』雲居雁の引き取りとその養育の問題から論じる。

まずは『源氏物語』年立、また史実における藤原氏の昇進の実態の検討から、内大臣による雲居雁の引き取りが、按察使大納言家の冷泉帝後宮争いへの参入を阻止する目的で行われていたことが明らかになった。そこには、自らの政治的不遇や官位停滞に対し、官位昇進が順調であった按察使大納言の政界進出を見越した内大臣の、非常に聡明な政治的判断が働いていたと言えよう。

一方、雲居雁の祖母である大宮にとっても、内大臣家の数少ない女兒である雲居雁の存在はまさしく最後の一手であった。高貴な后腹内親王として左大臣のもとに降嫁した大宮

が雲居雁に施した教育は、通常の姫君教育ではなく、「心ことに思ふ」という方針のもとで行われた后がね教育であったと考えられる。秋好の立后により政治の指揮を光源氏に奪われ、将来への不安を嘆く内大臣を支えたのは、他でもないこの母大宮の自負ではなかったか。

### 【第三章】『源氏物語』頭中将一族の結婚 ―皇女とのかかわりから―

第三章では左大臣一族の「結婚」について、特に皇女とのかかわりから検討を行う。皇室裁可によって后腹内親王が降嫁されるという左大臣と大宮の結婚については、史実や散文作品にはない異例のものであり、その異例と言うほかない高貴さを備える夫妻の在り方が婿である光源氏の強力な後見となっていたことが、これまでも先行研究において指摘されてきた。本章では改めて、後見のない一世源氏である光源氏の立場の脆弱さについて、史実における一世源氏の実態から確認し、この結婚が主人公光源氏の栄華達成のために不可欠のものとして用意された結婚であったことを述べる。

さらに、このような大宮と左大臣の結婚は、自身一族にも思わぬ形で影響をもたらすこととなる。本章の後半では、史実における藤原大臣家子息の結婚の実態を踏まえ、左大臣家の男子——頭中将、柏木——の結婚と皇女降嫁の問題について論じる。藤原氏同士の政治提携であるとされる頭中将と右大臣家・四の君の結婚については、これまで特に問題視されることはなかった。しかし、史実における藤原大臣家子息の結婚の実態との比較から、この結婚が頭中将自身の出自には不釣り合いで、不本意な結婚であったことが明らかになった。彼は、皇女降嫁によって大きく拓かれた父左大臣の人生を最も近い場所で眺めていた人物であると同時に、王族の女を正妻とすることができなかったことによる生き辛さを抱え込んだ、物語唯一の存在として描かれたと言えよう。

一方、史実における皇女降嫁の実態を改めて顧みると、頭中将の息子・柏木への女三の宮降嫁は、ほぼ実現不可能なものであったと言ってよい。にも拘らず、父・太政大臣（もとの頭中将）が最後までただ一人柏木への皇女降嫁へとこだわり続けたその背景には、彼自身の結婚への後悔と、これまでは表に出ることのなかった太政大臣自身の皇族の「血」への執着が浮かび上がるのである。

従来、若菜上巻以降にあらわれる皇女降嫁、皇女執着の問題については、政治敗者となった太政大臣一族の政治政策の一環としてにわかに浮上したものであったと見なされてきた。しかし皇女の降嫁というテーマが、実は太政大臣一族の《系譜》のひとつとして、物語の始発から既に織り込まれていたことが、本章の検討によって明らかになった。

### 【第四章】『源氏物語』柏木の女三の宮憧憬について ―「あて」の語をてがかりに―

第四章では柏木の女三の宮憧憬の淵源、具体的な相について、形容語の検討から考察を行う。従来、柏木の女三の宮執着については、彼女の「らうたし（らうたげ）」という美質に関わっての指摘が多かったが、本章では改めて柏木の視点から用いられる形容語を調査し、彼が、他者の持つ「あて」の美に強く惹かれる人物であったことを明らかにした。柏

木は、源氏からは見出されることのなかった女三の宮の「あて」の美をいちはやくとらえることによって、彼女にのめり込んでいったのである。

また柏木の「あて」好みは、女三の宮と妻・落葉の宮に見出した「あて」の程度の差異や、柏木亡きあとの落葉の宮に対する夕霧との視点の相違からも伺える。柏木が命を賭してまで執着し続けた女三の宮の魅力とは、無垢な精神によってかえって浮き彫りになっていく、女三の宮の驚くばかりの「あて」なる高貴性であったと言えよう。

#### 【第五章】『源氏物語』薫の「あて」へのまなざしをめぐって ―父と子を繋ぐもの―

第五章では第四章における考察を踏まえ、柏木の息子である薫のまなざしから、宇治の三姉妹（大君、中の君、浮舟）、また都の皇女たち（今上帝女一の宮、女二の宮）に用いられる形容語の検討を行う。

薫が最愛の人大君の面影を中の君、浮舟に求める時、そこにはやはり「あて」の美が重要な美質として見出されており、薫もまた父・柏木と同様「あて」の美への強い執着をみせる人物であったことがまず確認される。しかし薫は、女三の宮ただ一人に固執した柏木とは異なり、あくまで「あて」の美を手掛かりに、宇治の三姉妹や都の女一の宮、女二の宮といった様々な女君たちに惹かれていく。このような薫の姿は、道心と栄華への憧れという自己矛盾の中、あくまで自身の保身を図り続ける薫の生そのものの在り方にそのまま符号すると考えられる。

#### 【結】

本論文では、「政治」と「結婚」・「恋」という二つの視点から、『源氏物語』頭中将一族の紡ぐ《系譜》について考察を行った。たしかに頭中将一族は、主人公光源氏の栄華達成のために敗者としてその裏側を生きた一族である。しかし一方で、勝者光源氏とも互角に戦いうる優れた政治家としての一族の姿も物語は描いていたということを、本論文の考察を通じて明らかにすることができた。また本論文では頭中将とその一族の「結婚」と「恋」の《系譜》について、主に皇女との関わりから検討した。その結果、彼らは左大臣と大宮の異例の結婚を契機に、王族の血への執着を代々《系譜》として抱え込む一族として描かれていることが浮かび上がった。このようにみると頭中将とその一族の物語とは、それ自体が政治敗者の物語としてある固有の論理をもって描かれることによって、光源氏の王権の物語を裏側から支えていたと言えよう。

#### 注

- 1 深沢三千男『源氏物語の形成』（桜楓社、一九七二年）、日向一雅『源氏物語の準拠と話型』（至文堂、一九九九年）等。
- 2 鈴木日出男「内大臣（頭中将）論」『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、一九八一年。
- 3 『色ごのみの文学と王権 源氏物語の世界へ』新典社、一九九〇年。